青眼白頭

斎藤緑雨

○後生(こうせい)を口にすること、一派の癖のやうになりぬ。陸(りく)に汽車あり、海に汽船あり、今や文明の世の便利を主とすればなるべし。何故(なにゆゑ)といはんも事あたらしや、お互に後世に於て、鼻突合はす憂(うれひ)なければなり。憂は寧(むし)ろ、虞(ぐ)に作るをよしとす。

○仰有(おつしや)る通り皆(みな)後世に遺(のこ)りて、後世は一々これが批判に任ぜざる可(べ)からずとせば、なりたくなきは後世なるかな。後世は応(まさ)に塵芥掃除(ぢんかいさうぢよ)の請負所の如くなるべし。

○おもふがまゝに後世を軽侮せよ、後世は物言ふことなし、物言ふとも諸君の耳に入ることなし。

○天下後世をいかにせばやなど、何彼(なにか)につけて呼ぶ人

あるを見たる時、こはいかにせばやの意なるべしと、われは思へり。

○人（ひと）無茶苦茶に後世を呼ぶは、猶（なほ）救け舟を呼ぶが如し。身の半（なかば）は既（はや）葬られんとするに当りて、せつぱつまりて出づる声なり。

○識者といふものあり、都合のいゝ時呼出されず、わるい時呼出さる。割に合はぬこと、後世に似たり。示教を仰ぐの、乞ふのといふ奴に限りて、いで其（その）識者といふものゝ真（まこと）に出現すとも、一向言ふ事をきかぬは受合（うけあひ）也。

○僅（わづか）に三十一（みそひと）文字を以てすら、目に見えぬ鬼神（おにがみ）を感

ぜしむる国柄なり。況んや識者をや。目に見えぬものに驚くが如き、野暮なる今日の御代にはあらず。

○今人は今人のみ、古人の則に従ふを要せずと。尤もの事なり。後人亦斯く言はんか、それも尤もの事なり。

○さま〲なる世に在りて、いづれを上手と定めんは、いと難し。孰れを下手と定めんは、いと〱難し。上手を定めんよりも、下手を定めんは一層難き事なり。

○長く所謂素人たれ、黒人たる莫れ。技やよしあしの

何は問はず、黒人は存外まづいものなり、下手なものなり、いやでも黒人となりて、其処に衣食するに及べば、已に早く一生の相場は定まれるものなり。之を素人より見るに、黒人ばかり物知らぬはなし、弁へぬはなし。

○染めて返らぬ黒人が身は、進退共に一度づゝ、足を洗はざる可からず。素人は自在也。

○　志は行ふものとや、愚しき君よ、そは飢に奔るに過ぎず。志は唯卓を敲いて、なるべく高声に語るに止むべし。生半なる志を存せんは、存せざるに如かず、志は飯を食はす事なければなり。志は欠くも、飯は欠

くを得ざればなり。
○さりとも志を棄てんは惜しき時、一策あり、精々多く志を仕入れて、処嫌はず之を振廻さん事なり。成功を見ずと雖も、附け届けを見ん。脊負切れざる程なるをもて、志の妙となす。此れにも入るべし、彼れにも加はるべし、推移するに憚らざるが故に、さてなん人々今を聖代と称す。
○丈夫四方　志　と唐人の言ひけん、こは恐らくは八方の誤りなるべし。
○志を抱いて死す、さもしからずや。一般字典の訓ふる所によれば、大丈夫は男の義なり、女を抱いて死せ

んのみ。何で死んでも広告代は同額也。

○英雄を罵る、快事たり。美人を罵る、亦快事たり。されども共に、銭なき時の事たり。

○慷して慨せざる可けんやと、息巻荒き人の声の、蟇口の中より出づるものならぬは、今に於てわれの確信する所なりと雖も、曾て燕趙悲歌の士多してふ語をきける毎に、定めしお金が無かつたらうとおもふを禁め得ざりき。我れの矛盾にあらず、彼れの進歩のみ。

○儲けるを知つて遣ふを知らず、斥くべし。遣ふを

知つて儲けるを知らず、是亦斥くべし。さらば何とかすべき。儲けて而(しか)して遣へとは、儲けぬ人の言なり。遣つて而して儲けよとは、遣はぬ人の言なり。金ならずして斯くの如く同一なる問と、同一なる答との繰返さるゝはなかるべし。世に其問、其答の明瞭に過ぐるものは、おほむね不可能の事なり。繰返し来(きた)れる今日にありては、殊(こと)に不可能の事なり。呉にして越、火にして水を兼ねしめんとするものなり。

○使ふべきに使はず、使ふべからざるに使ふ、是れ銭金(ぜにかね)の本質にあらずや。疑義を挟むを要せず。

○一国、一家、一人(にん)を分けてもいはず、金に就て論議

の生ずるは、乏き時なり、少き時なり、お恥かしくも足らぬ時なり。工夫も然り、有る時にせず、無い時にす。

○孰か我邦の現状に見て、金は一切の清めなりといへる諺の、遂に奪ふまじき大原理たるに首肯かざらんや。近世最も驚くべきは、科学の進みなりとぞ。

○貧人が唯一の味方は、詩人なりと。げに然らん、詩人も唯一の貧人なれば。

○画をかく人々、字をかく人々に告ぐ。お金を払つて買つて下さるは、まことに難有いお方なり。併しながら大抵は、わからぬ奴なり。

○按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし。

底本：「日本の名随筆85　貧」作品社
　　　1989（平成元）年11月25日第1刷発行
　　　1991（平成3）年9月1日第3刷発行
底本の親本：「縮刷・緑雨全集」博文館
　　　1922（大正11）年4月
入力：渡邉　つよし
校正：門田　裕志
2001年9月20日公開
2005年12月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。